

不戦を誓う勿れ

かみや

ちかお

上谷 親夫 広幼 47

近年、戦争経験世代は、戦争の悲惨さ愚かさを確りと次世代に伝え、若い世代は、命の尊さ大切さを確りと身につけなければならぬという事が、頻りと叫ばれるようになってきた。そして日本人は全員、「不戦」を誓い合う雰囲気になってきている。殊に尖閣諸島に対する中国の示威行為が烈しくなり出してから、「不戦の誓い」は数多く耳にし目にするようになってきた。

では我が国民が全員不戦を誓っても、現実に外国が、武力を以て侵入してきた場合にはどうするのであるか。「不戦」を固く誓っている以上、当然戦争はしないであろう。という事は、我が国土を侵入者の蹂躪に任ずるか、白旗を掲げて降伏するか、採り得る道はこの何れしか無い。我が国の征服を拒む国にとって、国民の多数が不戦を誓い、戦争に反対し、戦う意識を喪失し抵抗しないでいて呉れるのであれば、これほど好都合なことは無い。正に無血占領が可能となるのである。

我が国の中には、降伏といつても大した事ではない。命まで取られる事は無い。日本は米国に降伏したが、現在、

こんなに栄えているではないか——と言う者がいる。確かに米国の日本占領というものは、歴史に例を見ない寛大なものであった。それは米国が、日本人の特攻精神・玉碎精神というものを身で以て体験し、その怖さというものを心の底から感じていたからである。その為、武力で弾圧すればどんな反撃を喰うかを思い、武力で制圧するのではなく、思想的に日本人の脳を腐らせる方策を採ったのである。日本人の中に日本人の敵を作り、今次の戦争は思いついた軍閥が、国民を無理矢理戦争に駆り出して起こした、無謀な侵略戦争であることを日本人の頭の中に浸透させ、日本人の誇りを破壊し、何でも米国は日本に優越しているとして従うよう強制し、日本人を精神的に米国の奴隷にしたのであった。

最近の我が国の「不戦の誓い」の浸透には、我が国を己が版図に収めんとする近隣膨張大国の、我が国に対する巧妙・徹底した、息の長い思想工作が感じられる。我々は、決して「不戦」などを誓ってはならない。我々は、我が国を略取せんとする国があれば、断固として実力を以て排除しなければならぬのである。さもなければ、我々の生存は保障されない。

我々は不戦を「誓う」のではなく、不退転の決意を以て、不戦を実現するにはどうすれば良いのかを「熟慮」し、「断行」しなければならないのである。